Osaka University Knowledge Archive

Title	移民言語研究の潮流 ： 日系人日本語変種の言語生態論的研究に向けて
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2010, 44, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10033
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

移民言語研究の潮流

――日系人日本語変種の言語生態論的研究に向けて――

渋　谷　勝　己

1. はじめに

近年、国や言語共同体の枠を超えて人が移動することがますます盛んになっている。そのような社会状況のなかで人々は、異なった言語を話す人と出会い、共通のことばを模索しつつ、相互にコミュニケーションを行っている。一方、このような、異なる言語を話す人々が接触するという事象は、古代から現代にいたるまで変わらずに起こってきたことでもある。人々はそのなかで、自身の言語を犠牲にして相手の言語を採用するようになる言語シフト（言語の消滅）や、接触した２つの言語を材料にしてひとつの共通言語を創り出す言語の融合といった行為を頻繁に行ってきた。

以下、本稿では、このような言語接触を対象にして行われた研究、なかでも移民言語の形成とその変容の過程を焦点化して行われたこれまでの研究を整理することを試みる。筆者らが取り組んでいる、日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究の一環をなすものである*。具体的には、まず第２節で20世紀に行われた言語接触研究の歴史をごく簡単に概観する。続く第３節では、とくに移民の言語を対象に行われた研究をいくつかの下位分野に分けて展望したあと、第４節において、移民日本語変種の分類と、それをめぐって行われた研究を概観する。そして第５節で、これらの移民言語変種を生み出す生態（ecology）をまとめることによって、今後進めるべき研究の方向を確認する。第６節はまとめである。

なお本稿では、分量の関係もあり、個別的な論文ではなく、その研究分野が一定程度成熟した段階にあることを示すバロメータである、著書を中心に取り上げることにする。したがって、当該分野の研究が着手されたのは、それよりも数年はさかのぼって考えるべきことになる。

2. 言語接触研究史素描

言語学の世界では、20世紀前半までは、言語接触のなかで観察される言語事象やその結果生まれた接触言語を分析することはそれほど盛んではなかった。たしかに、J. Schmidtが波状説を提起し、J. Gilliéronが方言接触という視点を欠いては成り立たない言語地理学の研究を行ったといったことがあり、またH. Schuhardtもピジンやクレオールの研究を推進するなど、言語接触を正面から取り上げた研究がいくつか行われはしたものの、いずれもそれぞれの時代の言語学の主流にはなりえなかった。当時の言語学の主流は、新たな言語は親言語が枝分かれすることによって生じる（別れたあとは融合しない）というモデルを描く19世紀の比較言語学であり、言語のシステムは要素の対立関係によって構成される自律的な体系であるとする20世紀の構造主義言語学である。このような時代においては、言語接触という事象はむしろ例外的、逸脱的な事象であり、ときに周辺的に取り上げられることはあっても、それが本格的な研究の対象に据えられることはほとんどなかった。

しかし、1950年代になって、アメリカで言語接触研究、とりわけ移民の言語を正面から取り上げたふたつの大きな研究が公にされる。ひとつはWeinreich（1953）であり、もうひとつはHaugen（1953）である。いずれもアメリカに移住したヨーロッパの人々の言語接触をその対象に盛り込んでいる。このような研究がこの時期に現れたことの理由には、この時期のアメリカは公民権運動が盛んであったということがかかわっていよう。

この公民権運動は、言語学の世界ではそれまで虐げられてきた人々の言語を研究するというかたちで展開し、その際に移民の言語も研究の対象になったという経緯がある。アフリカ系アメリカ人の英語や、アメリカやカリブ海の国々で使用されるピジンやクレオールの研究がこの時期に本格的に着手されていることにも、このような社会的背景があろう。

その後言語学の分野では、「程度の差はあれ、どの言語もなんらかのかたちで他の言語と接触し、変容を受けて現在の姿を呈している」という認識が徐々に力を得て、言語接触の研究が数多く行われるようになっている。いま個別的な研究はおくとして、言語接触研究が広く言語学界に承認されるようになったことを表す出版物には、次のようなものがある。

(a) 言語接触を専門に取り上げる教科書。Lehiste（1988）、Thomason（2001）、Matras（2009）など。

(b) 言語接触を専門に取り上げるジャーナル。*Journal of Pidgin and Creole Languages*（1986-）や*Journal of Language Contact*（2007-）など。

(c) 言語接触を専門に取り上げるシリーズ。Creole Language Library（John Benjamins、1986-）、Oxford Studies in Contact Linguistics（1991-）、Cambridge Approaches to Language Contact（2001-）など。

(d) 言語接触を専門に取り上げる展望論文集。Goebl et al.（1996-97）など。

(e) 新たな研究領域である接触言語学（contact linguistics）の教科書。Meyers-Scotton（2002）、Winford（2003）など。

(f) 言語接触研究（接触言語）のアンソロジーの刊行。Holm & Michaelis（2009）など。

このように言語接触の研究が盛んになるなかで、移民の言語を対象とする研究もその成果が着実に積み重ねられてきた。以下の節では移民の言語

を対象として行われた研究に焦点をしぼり、その研究の現在までの達成点を簡単にたどってみることにする。

3. 移民の言語をめぐる研究の現状

本稿でいう移民（移住者とも）とは、さまざまな理由によって外国に移動して、永住する人々、あるいは中・長期間にわたって定住、滞在する人々のことをいう。移民は、その移住の目的（就労、交易、留学、強制連行、避難など）や、ともに移動する人々の数（個人的移住、集団移住など）、移住先での居住形態（集住、個別的居住）、移住先の人々とのコミュニケーションのありかたなどに応じてそのことばのありかたも異なり（第５節）、下位のタイプに分類することができるが、ここでは一括して移民として言及することにする。なお、「移民」ということばには貧困等のマイナスイメージが伴うことが多いが、「エリート移民」等のことばに見るように中立的なことばになりつつある（庄司2005）。本稿でもその中立的な意味によってこのことばを使用することにする。

本節ではまず、世界のさまざまな地域で使用される移民の言語を対象にして行われた研究を、ごくおおまかに把握することを試みる。

3.1　移民の言語のライフサイクル

具体的な展望に入る前に、第３節および第４節で述べることの見取り図として、移民の言語の変容／交替過程をごく大まかにまとめておく。図１

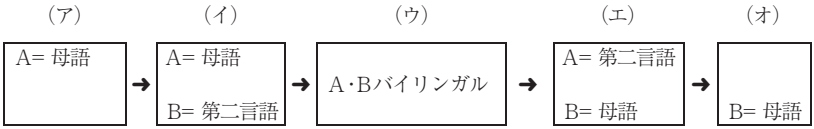

図１　移民言語の変容／交替過程

がそれである。

たとえば7歳まで日本で育った子どもが、両親とともにオーストラリアに移住したとする。この幼児はそれまで日本語（図1のA）のみを使用して生活してきたために英語の能力は皆無であるが（図1の（ア））、オーストラリアに移住して英語を使用することが必要になり、英語（図1のB）を習得しはじめる（図1の（イ））。その後オーストラリアの生活が長くなると、両親とは日本語、友人とは英語で話すようになるが（図1の（ウ））、たとえばそこで両親が帰国し、本人はそのままオーストラリアの大学に進学したりすると、日本語を使用する機会が減り、日本語の能力が摩滅するという事態が生じることになる（図1の（エ））。

この、図1に描き出したような母語の交替のプロセスは、子どもの場合には一世代一人の話し手のなかで起こることもあるが、移住者が成人の場合には三世代かけて起こることが多い。すなわち、移住第一世代は図1の（イ）まで進み、第二世代は（ウ）のバイリンガルとなり、第三世代は祖父母の世代の母語を継承せず、移住先の言語にシフトするというプロセスである。

なお、図1のBの言語は、上では移住先で話される言語（目標言語）としたが、目標言語のインプットなどが十分にえられない状況のもとでは、移住者集団の言語と移住先集団の言語を混交させたりするなどして新たに創り出す接触言語であることもある。この混交の度合いには、単純な内容語の借用（いわゆる借用）から、文法事象を含めた二言語の融合（接触言語の発生）まで、さまざまな段階がある（Thomason & Kaufman 1988）。

また、移住者の数が多数であり、当該移住集団の内部だけで生活を送ることができるような場合には、移住先言語を習得せず、自身の母語を維持する（図1の（ア））といったこともないわけではない。

さて、移民の言語をめぐっては、これまで、主に、次のような側面につ

いて研究が進められてきた。

（a）移民に特徴的な言語の体系記述およびその変容過程の研究

（a-1）移民に特徴的な言語の形成とその発達プロセスの研究

（a-2）移民の母語の維持と摩滅の研究

（b）移民の言語行動の研究

（a-1）は主に図１の（ア）～（ウ）の段階のＢ＝第二言語や接触言語を対象とする研究、（a-2）は主に（ウ）～（オ）の段階のＡ＝母語の変容過程に注目する研究であり、（b）は主として（ウ）の段階におけるＡ、Ｂ両言語の運用の側面を分析するタイプの研究である。

以下、本節では、研究史的な意義をもつ研究者や著書によって、それぞれの分野の特徴をまとめてみることにする。

3. 2　移民に特徴的な言語の体系記述およびその変容過程の研究

3.2.1　移民に特徴的な言語の形成とその発達プロセスの研究

（a-1）はさまざまな発達段階にある、移民に特徴的な言語（以下、移民言語とする）の形成過程、体系の記述、その拡張のプロセスなどを明らかにしようとするものである。このタイプの研究がこれまでもっとも推進されてきたのは、主に、移民の使用するピジン、クレオールの形成過程やその体系、移住先で話される言語の習得（第二言語習得）の過程を明らかにしようとする分野においてである。

まずピジン・クレオールの研究は、H. Schuhardt（Gilbert 1980）らの先駆的な研究が行われたあと、J. ReineckeやA. Valdman、D. DeCamp、R. Le Page、K. Whinnomらによって個別的な研究が積み重ねられる（初期の研究はReinecke et al.1975など参照）。モノグラフもBailey（1966、Jamaica）、Nagara（1972、Hawaii）、Bickerton（1975、Guyana）、Siegel（1987、Fiji）、Keesing（1988、Melanesia）などが刊行され、その間、

Bickerton（1981）によるbioprogramのような、ピジン・クレオール形成の理論化へ向けての試みもなされるようになった。Hymes（1971）やValdman（1977）などからKouwenberg & Singler（2008）まで多数刊行された会議録や論文集、ハンドブックも、この分野の研究を推進するのに寄与している。記述書も、Verhaar（1995）やCrowley（2004）などの包括的な記述を目指したものが著されはじめた。研究分野としての成熟を示す概説書や教科書類も、Hall（1966）をはじめとして、Todd（1974）、Mühlhäusler（1986）、Romaine（1988）、Holm（1988-89）、Siegel（2008）など、継続的に刊行されている。

一方、移民（労働者）による第二言語の習得（自然習得）については、ドイツにおいてZISA（Zweitspracherwerb Italienischer und Spanischer Arbeiter、Klein & Dittmar 1979など）と、HPD（Heidelberger Forschungsprojekt “Pidgin-Deutsch”）の２つの大きなプロジェクトが1970年代に行われ、その後、European Science Foundationによるプロジェクトなどに発展している（Perdue 1984、Klein & Perdue 1992など）。これらのプロジェクトに参加したJ. Meisel、M. Pienemann、W. Klein、N. Dittmarらは、その後もこの領域の研究を推進している。

なおこの間、ピジン化やクレオール化と第二言語習得の関係を考える試みもいくつか行われた。たとえばBickerton（1977:49）は“Pidginization is second language learning with restricted input and creolization is first language learning with restricted input.”と述べている。その後両者の関係は、*Studies in Second Language* Vol.3-2（1981）やAndersen（1983）をはじめとして、さらに検討が加えられている。

3.2.2　移民の母語の維持と摩滅の研究

次に、（a-2）の、移民の母語の維持と摩滅の研究は、（a-1）の第二言語

習得のプロセスの、いわば裏の側面を取り上げる研究である。

この、移住者の母語の維持と摩滅の研究は、近年、言語権という概念が提唱され、移民の継承語（heritage language）の問題が脚光を浴びるようになる動きのなかで注目されつつあるが、移住者を対象として、具体的な言語事象を取り上げて行う縦断的な研究はまだそれほど多いわけではない（金（印刷中）の研究展望参照）。ただし、言語の摩滅、衰退といった、より大きな視点からの研究には、大言語に圧迫されて消えゆく少数言語（危機言語）を取り上げたDorian（1981）をはじめとしてすでに一定の蓄積がある。今後、これらの研究を参照しつつ、研究を深めるべき分野であろう。

3.3　移民の言語行動の研究

最後に、移民の言語を対象として行われた研究の３つめとして、(b) 移民の言語行動の研究がある。この分野では、移民の発話行為や相互行為のありかたなどが研究対象となるはずであるが、それらの研究はあまり行われてはいない。そのなかで比較的研究が盛んなのは、移民の言語が参与するコード切り換えの研究である。

コード切り換えを行うには２つの言語について一定程度の能力が必要となるために、その研究の多くは（もともと）多言語地域であるところのバイリンガルを対象としたもの（二言語間のコード切り換えを論じたものではないがBlom & Gumperz 1972など）が多いが、図１の（ウ）の段階の話者を対象としたものがいくつかある。たとえば、Poplackらによるアメリカのヒスパニックを対象とした研究や（Poplack 1979/1980）、Li（1994）によるイギリスに居住する中国人のコード切り換えを記述したものなどがその代表的なものである。

移民の言語に限らずコード切り換えの研究は、一般に、(i) どのよう

な統語的単位でコードが切り換わるかという構造的な側面と（Muysken 2000など）、(ii) コード切り換えはどのような社会的機能を担うのかといった談話的、対人的側面の（上記Liなど）、２つの方向からなされてきた。

４．日本語をめぐる移民言語研究の展開

以上、第３節でまとめた移民言語研究の研究史、研究上の特徴を背景にして、本節では、日本語がかかわる移民言語を対象に行われた研究をまとめてみよう。ここでは第３節とは異なって、その使用者のタイプごとにまとめることにする。

4.1　日本語がかかわる移民言語のタイプ

日本語がかかわる移民言語（以下、移民日本語変種）には、その使用者によって、表１のようなタイプのものがある。

表１にまとめたそれぞれの日本語変種については、その言語の社会的背景とも関連して、一方には1970年代という比較的早い時期から研究が着

表１　移民日本語変種のタイプ

① 海外に移住した日本人の使用する日本語変種
　①-1 永住者の日本語変種：日系アメリカ人・日系カナダ人、日系ブラジル人・日系ボリビア人など
　①-2 長期・短期滞在者の日本語変種：日本人海外滞在者の子どもなど
② 海外に移住した日本人が残した日本語変種（残存日本語）：韓国・台湾・ミクロネシア・サハリンなど
③ 日本滞在者が自国に持ち帰った日本語変種：滞在者・留学生・その同伴者など
（以上、海外の日本語変種、World Japaneses）
④ 日本に移住してきた移民の日本語変種
　④-1 永住者の日本語変種：在日コリアン・在日中国人；日本人配偶者・中国帰国者など
　④-2 長期・短期滞在者の日本語変種：在日日系就労者・海外からの就労者（永住者もあり）；教室で学ぶ日本語学習者など
（以上、国内の日本語変種）

手されたものがあり（① 海外に移住した日本人の使用する日本語変種のうち①-1の永住者の変種や、④-2長期・短期滞在者のなかの教室で学ぶ日本語学習者が使用する日本語変種のうち誤用とされた部分など）、また一方には、1990年代になってようやく研究が行われるようになったもの（② 海外に移住した日本人が残した日本語変種（以下、残存日本語とする）や、④-2長期・短期滞在者のなかの在日日系就労者の日本語変種など）、あるいは、本格的な研究がまだほとんど行われていないもの（③ 日本滞在者が自国に持ち帰った日本語変種など）などがある。

以上のうち早い時期に行われた研究は、研究というよりも、当該日本語変種のなかで目に付く特徴（母語話者の日本語変種とは異なる特徴）を列挙しただけの総花的なものが多く、個別的な言語事象について深く掘り下げて分析するようになったのは、どの変種についてもこの20年ほどのことである。④-2のなかの教室で学ぶ日本語学習者が使用する日本語変種（中間言語）を除けば、それぞれの日本語変種を研究する研究者の数もそれほど多いわけではないので、研究に十分な蓄積があるというわけでもない。

以下、本節では、④-2のなかの教室で学ぶ日本語学習者が使用する日本語変種（中間言語）を除き、表１に記載した変種ごとに、研究の流れをごく概略的にまとめてみたい。

4.2　海外に移住した日本人の使用する日本語変種

まず、表１①の海外に移住した日本人の使用する日本語変種のうち、①-1永住者の使用する日本語変種とは、明治以降、ハワイや北米、南米に移住した日系アメリカ人や日系カナダ人、日系ブラジル人・日系ボリビア人などが移住先で現在も維持する日本語の変種である。

このうちハワイの日本語変種については、井上（1971）や比嘉（1974）、

足立（1983、1985）などの初期の研究があり、続いて小林（1989）なども著されているが、研究の蓄積はそれほど多いわけではない。1900年代半ばの日本語新聞『ヒロタイムス』で用いられたハワイの日本語に特徴的な語彙を調査した島田・本田（2008）などが最近のものである。

一方ブラジルについては、野元（1969）、金岡（1973）、原口（1975）、長尾（1975）、鈴木（1979）、本堂（1981）などをはじめとして、多くの論考が著されてきた。現地に住む半田知雄なども以前から活発に発言を行っており、半田（1980）などで日本に向けてブラジルの日本語の実態を紹介している。近年では、ブラジル日系一世の日本語で使用されるポルトガル語からの借用形式を調査した久山（2000）、敬意表現を分析した山下（2007）、談話の実態を広く紹介している工藤他（2009）などがあり、研究がますます活性化している。『国文学解釈と鑑賞　特集 南米の日本人と日本語』71-1（2006）などの特集も組まれた。

カナダの日本語変種についても、数は少ないが（日比谷・高木2010参照）、彦坂（1996）やNishimura（1997）などの研究が行われてきた。後者では、日系人のコード切り換え行動が詳細に分析されている。

次に、①-2の日本人短期滞在者の子どもについては、海外に移り住んだ子どもたちを対象にして、Yukawa（1998）などが、日本語の維持と摩滅、日本語の能力と移住先で習得した言語の能力の関係などを分析しているが、ここでもその数はそれほど多いわけではない（大人の滞在者についても日本語（母語）の摩滅が生じているのかもしれないが、目に見えるかたちでは現れにくい）。しかも日本人短期滞在者の子どもを対象とした場合、その研究は日本語ではなく、日本に帰国したあとの英語などの摩滅のほうに焦点があたることが多い（Hansen 1999など）。

4.3　海外に移住した日本人が残した日本語変種（残存日本語）

次に、②の、戦前、戦中に韓国・台湾・ミクロネシア・サハリンなどの日本の植民地であったところに移住した日本人が現地に残した残存日本語がある。それぞれの植民地において現地の子どもたちが、日本の皇民化教育の一環として日本語教育を受け、また卒業後日本人とコミュニケーションをとりつつ生活するなかで身につけた日本語である。

植民地等に発生したあらたな言語変種については、英語を中心に研究が盛んに行われてきており（Kachru 1982）、近年でもWorld Englishesのカバータームのもと、その成立過程を含めて研究がますます活性化しているが（Schneider 2007、Mesthrie & Bhatt 2008など）、日本語についても、韓国（木口2004、黄2008）、台湾（簡2003）、ミクロネシア（Toki 1998。松本2010の文献参照）、サハリン（朝日2010の文献参照）など、研究が活発に展開されており、その人称代名詞や否定辞、可能表現、文末詞などの文法能力や運用実態が明らかにされつつある。真田（2009）はその概況を、話し手の談話を引用しつつまとめたものである。

なお、このタイプの日本語変種の話し手は終戦時に7歳以上、現在では70歳以上の高齢者がほとんどであり、そのデータの蓄積と記述がもっとも急がれるところである。ただし台湾やパラオでは、植民地時代に日本語教育を受けていない世代のなかにも、親などが日本語を話すのを聞いて自然習得した層もあるようである。また台湾では、現地の言語（アタヤル語）と日本語が混交した接触言語であるYilan Creole（Chien & Sanada 2010）などの変種があり、中年層にも使用されていることが報告されている。

4.4　日本滞在者が自国に持ち帰った日本語変種

海外の日本語変種の最後として、表１の③日本滞在者が持ち帰った（あとに変容を受けた）日本語変種がある。この変種には、日本に赴任する会

社員や留学する学生本人が持ち帰るもののほか、その配偶者や子どもなどの、多くは来日時に日本語能力をもっていない同伴者が日本滞在中に日本語を（教室で、あるいは自然に）身につけて（白畑1993など）持ち帰る種類のものがあり、いずれも帰国後には、なんらかのかたちで摩滅が生じるものである。

この変種については、日本に留学して主に教室のなかで日本語を身につけた学生の日本語も含め、これまでほとんど研究が行われてこなかったが、ようやく金（2009, 2010）などが刊行され、研究が着手された状況である。

4.5　日本に移住してきた移民の日本語変種

次に、日本国内の移民日本語変種に目を移そう。

表１の④、日本に移住してきた移民の日本語のうち、④-1在日コリアン・在日中国人、日本人配偶者、中国帰国者などの永住者をめぐる研究は、これまでのところ在日コリアンを対象にするものがもっとも多くなされており、真田他編（2005）がその実態を広くまとめている。在日中国人をめぐる研究はそれほど多くはないが、このことには、当該グループに特徴的な日本語変種が見出せないということがあるかもしれない。日本人配偶者や中国帰国者については、日本語教育という観点からの研究は多いが（高木他2002など）、記述的な研究はあまり見当たらない。

また、④-2在日日系就労者や他の国からの就労者の使用する日本語変種については、愛知県豊田市在住のブラジル日系人日本語変種を取り上げた土岐編（1998）がある。ここでは、音声、絵の説明のタスク、テンス・アスペクト、時間概念、読み能力と書字能力、第二言語話者と第一言語話者とのやりとりにおける理解達成のプロセスなどが分析されている。また、藤沢市周辺の在住者については、古石・平高（1998）などの研究も公刊さ

れている。

その他、日本語の自然習得ということをハイライトした研究に長友編（2002）があり、そのなかで、「が」と「は」、引用表現、文末表現などが分析されている。また、雑誌『日本語学』の特集「自然習得による日本語学習」（ Vol.24-3、2005）でも、自然習得の事例やこれまでに行われた研究がまとめられている。

5. 移民言語を生み出す生態

以上、第３節および第４節において、移民言語変種一般や移民日本語変種を対象に据え、その実態を描き出そうとする研究の流れと現状を概観した。移民言語変種の記述のあとには、各移民言語がそのような姿をとるにいたった経緯（生態ecology）とはどのようなものかを明らかにする作業が残されている。本節ではその生態を構成する要素について、今後の課題として展望的に描き出しておこう。

5.1　移住後の言語のありかたを左右する要因

移住者集団が、これまで整理してきたような母語の維持、移住先で使用される言語の習得、さらにはシフト、あるいは接触言語の創造などのうちいずれの行動をとり、その結果そこにどのような言語（状況）が生じるかということには、第３節の冒頭で述べた移民のタイプも含めて、相互に関連するところのある次のような要因がかかわっている（以下本稿ではMufwene 2001のモデルを参照する）。

表２　移民言語変種の形成要因

① 言語外的要因 　①-1 マクロ（言語集団間の関係）の要因 ・移住集団の移住目的 ・それぞれの言語集団の人口比 ・それぞれの言語集団の社会的地位や力関係、経済力 ・それぞれの言語集団の集住度（ディアスポラを構成するか） ・それぞれの言語集団に対する態度や言語政策 　①-2 ミクロ（個人間インターアクション）の要因 ・言語集団間のインターアクションの目的 ・言語集団間のインターアクションの頻度 ・言語集団間のアコモデーションのありかた ② 言語内的要因 ・接触する言語間の系統的関係 ・接触する言語間の（言語的、心理的）類型的関係など

5.2　移民言語変種の生成と拡散のメカニズム

また、移民言語変種が生成される際のメカニズムは、次のように考えることができる。

まず移住した移民は、ときに語学学校や政府の組織が運営する語学教室等において指導を受けつつ移住先の言語を習得することもあるが、基本的には自然習得を行うことが多い。自然習得（教室での習得の場合も一部同様）とは、次のようなプロセスを含んだ行為である。

（a）習得者は、自身が得たインプットをもとに目標言語の習得を進めると同時に、類推（過剰一般化）や再分析、再構造化等の操作によって目標言語にはない新たな言語要素、言語規則を生み出す（複数の習得者が結果的に同じものを生み出すこともある）。ここには、当該習得者による、当該言語を話す（母語・非母語）話者のことばの不完全模倣（imperfect replication, Lass 1997）ということがかかわっている。このプロセスにはそのほかに、個々の学習者の言語適性（language aptitude）や母語と目標言語の異同（表2の②））など、第二言語習得研究で指摘される言語内外

の要因（Ellis 1994）もあわせて関与する。このときに、目標言語のインプットが十分に得られれば第二言語の習得が起こるが、それが十分に得られない状況では、習得者（複数）は自身や他者の話す別の言語の要素を取り込みながら、相互の意思疎通のためのピジンなどを創り出すことになる。

（b）そのようにして生み出された言語要素や言語規則は、それを創り出した話者個人のなかにとどまる場合もあるが、他者（同じ移住者集団に属する者、移住先集団に属する者）とのインターアクションを通じて、社会的、地理的、言語内的に伝播することがある。このとき、他者との（ごく限られた目的のための）インターアクションの頻度が高い、コミュニケーションをとろうとする意欲が高く他者へのアコモデーションがよく行われるといった状況がある場合には、移民言語はひとつのシステムとして収束していく（focusing）可能性がある。

（c）ただしそのようにして生じた移民言語変種は、それがとくに目標とした言語と同じ言語共同体のなかで共存して使用される場合には、社会的に低い評価が与えられることが多く、（それを自他ともに認め、）常に目標言語（上位言語、語彙供与言語など）に近づいていく、あるいは意図的に遠ざかる可能性をもっている。その結果、ひとりの話者やひとつの言語共同体のなかには、ほぼ同じ意味を表す移民言語と目標言語のバリエーションが存在することになり、ここで、バリアントの競合（competition）と選択（selection）、社会的・意味的棲み分け等が起こることになる。

以上のような視点からそれぞれの移民言語変種、移民日本語変種の形成過程を考察していくためには、複数の変種のそれを同じ視点で比較することが望ましい。今後の課題として残されているところである。

6. まとめ

以上、本稿では、移民日本語変種など、移民言語変種の成立過程を研究

するための前段階として、言語接触研究の歴史（第２節）、移民言語変種研究の現状（第３節）、移民日本語変種研究の現状（第４節）、移民言語変種を形成する言語内外の要因とそのプロセス（第５節）等を整理した。

今後は、第４節で取り上げた移民日本語変種のうち、①海外に移住した日本人およびその子孫の使用する日本語変種（日系二世に使用される残存日本語を含む）を主な対象として、(1) 先行研究が取り上げた言語事象とその分析結果を整理したあと、(2) 筆者らのプロジェクトで集めることを予定している、日系カナダ人、日系ブラジル人、日系ボリビア人、日系パラオ人の移民日本語変種の談話データのなかから具体的な言語事象を取り上げて分析し、相互の異同とその成立にあずかった生態を、相互に比較しつつ明らかにしていくことを予定している。

＊本研究は、平成22年度科学研究費補助金基盤研究（C）「日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究」（研究代表者：渋谷勝己、課題番号22520466）の一環として行われたものである。

引用文献

朝日祥之（2010）「サハリンに生まれた日本語の接触方言」『日本語学』29-6
足立聿宏（1983、1985）「ハワイ日系人の言語的同化過程とその社会的背景（1）（2）（3）」『関西外国語大学研究論集』37、38、41
井上史雄（1971）「ハワイ日系人の日本語と英語」『言語生活』236
金岡孝（1973）「ブラジル日系二世の日本語と日本語教育」『松村博司教授定年退官記念国語国文学論集』名古屋大学国語国文学会
簡月真（2003）『台湾に残存する日本語の実態』大阪大学大学院文学研究科博士学位申請論文、Book Park
木口政樹（2004）『韓国における残存日本語の摩滅に関する研究－韓国人高齢者コーパスの分析を通して－』韓国中央大学校博士学位論文
金昴京（2009）「帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅－語彙の変化に注目して－」『日語日文学研究』71輯
金昴京（2010）「帰国子女の日本語の維持と摩滅」『日本語学』29-14
金昴京（印刷中）「第二言語の摩滅研究の潮流」『阪大社会言語学研究ノート』9

工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵（2009）『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房
久山恵（2000）「ブラジル日系一世の日本語におけるポルトガル語借用－その形態と運用－」『社会言語科学』3-1
小林素文（1989）『複合民族社会と言語問題』大修館書店
真田信治（2009）『越境した日本語－話者の語りから－』和泉書院
真田信治・生越直樹・任榮哲編（2005）『在日コリアンの言語相』和泉書院
島田めぐみ・本田正文（2008）「日本語新聞に見るハワイ日本語の特徴」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』59
庄司博司（2005）「移民・移住者」真田信治・庄司博司編『事典 日本の多言語社会』岩波書店
白畑知彦（1993）「幼児の第２言語としての日本語獲得と「ノ」の過剰生成－韓国人幼児の縦断研究－」『日本語教育』81
鈴木英夫（1979）「ブラジル日系社会における外来語」『名古屋大学教養部紀要 A（人文科学・社会科学）』23
高木裕子他（2002）『定住型外国人を対象にした“地域共通語”教材開発に関する研究』平成10年度～平成12年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書 山形大学
土岐哲編（1998）『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成6年度～平成8年度科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書 大阪大学
長尾勇（1975）「ブラジルの言語生活」『言語生活』284
長友和彦編（2002）『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成12年度～平成13年度科学研究費補助金（萌芽的研究）研究成果報告書 お茶の水女子大学
野元菊雄（1969）「ブラジルの日本語」『言語生活』219
原口裕（1975）「訛形の定着－ブラジル日系人の言語調査から－」『語文研究』39～40
半田知雄（1980）「ブラジル日系社会における日本語の問題（一）（二）（完）」『言語生活』346、347、348
比嘉正範（1974）「ハワイの日本語の社会言語学的研究」『学術月報』26-11
彦坂佳宣（1996）「バンクーバー周辺日系人の言語状況－日本語継承の諸相から－」木村一信・奥村剋三編『世紀転換期の日本と世界5 文化の変容と再生』法律文化社
日比谷潤子・高木千恵（2010）「日系カナダ人の日本語」『日本語学』29-6

黄永熙（2008）『韓国高年層日本語の実態からみる第二言語の保持』大阪大学博士学位申請論文

古石篤子・平高史也（1998）『藤沢市及び藤沢市周辺のブラジル出身者の言語使用状況に関する調査』慶應義塾大学 湘南藤沢学会

本堂寛（1981）「ブラジルの日本語－その調査と実態の一端－」『日本語教育』44

松本和子（2010）「ミクロネシアの日本語」『日本語学』29-6

山下暁美（2007）『海外の日本語の新しい秩序』三元社

Andersen, R. (ed.) (1983) *Pidginization and Creolization as Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.

Bailey, B. L. (1966) *Jamaican Creole Syntax*. London: Cambridge University Press.

Bickerton, D. (1975) *Dynamics of a Creole System*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bickerton, D. (1977) Pidginization and creolization: language acquisition and language universals. In Valdman (ed.), pp.49-69.

Bickerton, D. (1981) *The Roots of Language*. Ann Arbor, MI: Karoma.

Blom, J.-P. and J. J.Gumperz (1972) Social meaning in linguistic structure: code-switching in Norway. In J. J. Gumperz and D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics: The ethnography of communication*. Oxford: Basil Blackwell.

Chien, Y. and S. Sanada (2010) Yilan Creole in Taiwan. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 25-2: 350-357.

Crowley, T. (2004) *Bislama Reference Grammar. Oceanic Linguistics Special Publication* No.31. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Dorian, N. (1981) *Language Death: The life cycle of a Scottish Gaelic dialect*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Ellis, R. (1994) *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.

Gilbert, G.G. (1980) *Pidgin and Creole Languages: Selected essays by Hugo Schuchardt*. Cambridge: Cambridge University Press.

Goebl, H. et al. (eds.)(1996-97) *Contact Linguistics: An international handbook of contemporary research*. Berlin: Walter de Gruyter & Co.

Hall, R. (1966) *Pidgin and Creole Languages*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Hansen, L. (ed.)(1999) *Second Language Attrition in Japanese Contexts*. New York: Oxford University Press.

Haugen, E. (1953) *The Norwegian Language in America: A study in bilingual behaviour*. Bloomington, IN: Indiana University Press.

Holm, J. (1988-89) *Pidgins and Creoles*. 2 Vols. Cambridge: Cambridge University Press.

Holm, J. and S. Michaelis (eds.)(2009) *Contact Languages: Critical concepts in language studies*. 5 Vols. London: Routledge.

Hymes, D. (ed.)(1971) *Pidginization and Creolization of Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kachru, B. (1982) *The Other Tongue: English across cultures*. Urbana: University of Illinois Press.

Keesing, R. M. (1988) *Melanesian Pidgin and Oceanic Substrate*. Stanford: Stanford University Press.

Klein, W. and N. Dittmar (1979) *Developing Grammars: The acquisition of German syntax by foreign workers*. Berlin: Springer-Verlag.

Klein, W. and C. Perdue (1992) *Utterance Structure: Developing grammars again*. Amsterdam: John Benjamins.

Kouwenberg, S. and J. V. Singler (eds.)(2008) *The Handbook of Pidgin and Creole Studies*. Malden, MA: Wiley-Blackwell.

Lass, R. (1997) *Historical Linguistics and Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lehiste, I. (1988) *Lectures on Language Contact*. Cambridge, MA: MIT Press.

Li, W. (1994) *Three Generations, Two Languages, One Family: Language choice and language shift in a Chinese community in Britain*. Clevedon: Multilingual Matters.

Matras, Y. (2009) *Language Contact*. Cambridge: Cambridge University Press.

Mesthrie, R. and R. M. Bhatt (2008) *World Englishes: The study of new linguistic varieties*. Cambridge: Cambridge University Press.

Meyers-Scotton, C. (2002) *Contact Linguistics: Bilingual encounters and grammatical outcomes*. Oxford: Oxford University Press.

Mühlhäusler, P. (1986) *Pidgin and Creole Linguistics*. London: Blackwell.

Mufwene, S. S. (2001) *The Ecology of Language Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.

Muysken, P. (2000) *Bilingual Speech: A typology of code-mixing*. Cambridge:

Cambridge University Press.

Nagara, S. (1972) *Japanese Pidgin English in Hawaii: A bilingual description*. Honolulu: University Press of Hawaii.

Nishimura, M. (1997) *Japanese/English Code Switching: Syntax and pragmatics*. New York: Peter Lang Publishing.

Perdue, C. (ed.)(1984) *Second Language Acquisition by Adult Immigrants: A field manual*. Rowley, MA: Newbury House.

Poplack, S. (1979/1980) Sometimes I'll start a sentence in Spanish *y termino en español*: toward a typology of code-switching. *Linguistics* 18: 581-618.

Reinecke, J. E. (1969) *Language and Dialect in Hawaii: A sociolinguistic survey to 1935*. Tsuzaki, S. (ed.) Honolulu: University Press of Hawaii.

Reinecke, J. E., D. DeCamp, I. F. Hancock, S. M. Tsuzaki and R. E. Wood (eds.) (1975) *A Bibliography of Pidgin and Creole Languages*. Honolulu: The University of Hawaii Press.

Romaine, S. (1988) *Pidgin and Creole Languages*. London: Longman.

Schneider, E. W. (2007) *Postcolonial English: Varieties around the world*. Cambridge: Cambridge University Press.

Siegel, J. (1987) *Language Contact in a Plantation Environment: A sociolinguistic history of Fiji*. Cambridge: Cambridge University Press.

Siegel, J. (2008) *The Emergence of Pidgin and Creole Languages*. Oxford: Oxford University Press.

Thomason, S. G. (2001) *Language Contact: An introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Thomason, S.G. and T. Kaufman (1988) *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkley: University of California Press.

Todd, L. (1974) *Pidgins and Creoles*. London: Routledge and Kegan Paul.

Toki, S. (ed.)(1998) The remnants of Japanese in Micronesia.『大阪大学文学部紀要』38

Valdman, A. (ed.)(1977) *Pidgin and Creole Linguistics*. Bloomington, IN: Indiana University Press.

Verhaar, J. W. M. (1995) *Toward a Reference Grammar of Tok Pisin: An experiment in corpus linguistics. Oceanic Linguistics Special Publication* No.26. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Weinreich, U. (1953) *Languages in Contact: Findings and problems*. New York: Linguistic Circle of New York.

Winford, D. (2003) *An Introduction to Contact Linguistics*. London: Blackwell.
Yukawa, E. (1998) *L1 Japanese Attrition and Regaining: Three case studies of two early bilingual children*. Tokyo: Kuroshio Publishers.

（文学研究科教授）

SUMMARY

Current Trends in the Study of Immigrant Languages
—Toward an ecolinguistic study of immigrant varieties of Japanese—

Katsumi SHIBUYA

This paper aims to trace the history of the study of language contact, paying special attention to the study of immigrant languages. Up to the mid 20th century, the study of language contact was not part of the mainstream field of research in linguistics. But starting from works by U. Weinreich and E. Haugen, this field of research has made a great progress, supported by the idea that no language is free from language contact. Today we now have many textbooks, journals, book series, handbooks and anthologies on language contact or contact linguistics which are specifically devoted to the study of language contact.

As the number of works on language contact increased, the works on immigrant languages also gained in number. The latter works usually highlight the processes of L2 (including pidgin) expansion and L1 attrition, and performance such as code switching by bilingual speakers.

Among the works on immigrant languages we have research on immigrant Japanese which includes such varieties as: (1) varieties spoken in foreign countries such as those maintained by emigrants to such places as Hawai'i, Canada, Brazil and Bolivia, and remnant Japanese in the former Japanese colonies; (2) varieties spoken in Japan such as those used by current overseas students, guest arbeiters, Korean and Chinese permanent residents. All these varieties await further description of their grammatical systems and explanation on the process of their formation from an ecolinguistic point of view.

キーワード：移民，言語接触，移民言語，移民日本語